



いつもありがとうございます！
きしゅう会計の名倉です。気がつけば2月。若い頃は「バレンタインデーにチョコレート貰えるかな？」とドキドキワクワクしてたのですが、それはもう遠い昔。50歳を回った今では、義理チョコ以外届く予定はなく、淡々と確定申告モードの季節です(笑)。ここ数ヶ月、トレーニングもおそろかだったのですが、ちょっと奮起。気合をいれようと、年末年始に面白いイベントに参加してきました。

「伊勢神宮初詣 ウルトラウォーキング」
奈良の榛原(はいばら)から伊勢神宮までの



伊勢街道100キロを歩いて初詣といったものです。「100キロのウルトラマラソンは何度も完走してるので楽勝だぜ！」と思って参加しましたが、歩くのと走るのでは使う筋肉は違うらしく、結構大変でした。でも北は北海道、南は長崎からの参加者もあり、ゆっくり話をしながらのウォーキングはランとは違う趣があり、面白かったです。極寒の中を睡魔と闘いながら仲間といっしょに目指す伊勢神宮。田んぼの畦道で、立ち止まり全員で輪をつくり、月の光の中、新年を迎えるカウントダウン！手にはクラッカーが配られて、10・9・8……3・2・1！



「おめでとう！」パーンの閃光(その瞬間にキスをするカップルも、、、欧米か！笑) 素敵な非日常でした。参加者は全員で50名くらい。「ウォーキング

の大会なのでアスリートの猛者はいないだろう」と思っていたがおられたんですねえ。岡山から参加の女性アスリートのYさんにいい刺激を頂きました。彼女はUTMFも完走しており、トレイルランやウルトラマラソンの大会では上位入賞の常連のようでした。「Yさん、月間300キロくらい走ってはるんですか？」の問いに「えっ、300キロって、フルマラソンの練習くらいですやん、それじゃ、ちょっと少ないかな」と、月間500から600キロは走られているようでした。また、このスーパーウォーキングの前日にも、大阪から奈良まで40キロ強を走って来られたようで、笑いながらのスーパーウォーキングのようでした。



僕はランにはまって5年目。最初の頃はいつかUTMFを完走するぞ！と意気込んだつもりでしたが、いつのうちに諦めてしまったんですねえ。富士山の周りをグルリと一周46時間制限の160キロ。獲得標高差10000メートル(トータルではエベレストをゼロ合目から登るのを軽く超えます)日本屈指のトレイルランの大会。



実際にUTMFを完走されたYさんと出会って、話を聞いた時、もう20年になるかな、昔御坊で聞いた、さだまささんのライブの話を思い出しました。

「最近、毛利さんが宇宙飛行士になってスペースシャトルに乗りました。子供の頃ってみんな、宇宙飛行士になりたい、プロ野球の選手になりたい、なんて夢を持つんですね。でも

殆んどの方はそこまで届きません。いつの間にか諦めているんですよ。無理だって、、、でも毛利さんのように届く人もいる。それは諦めなかった人なんですね」。

Yさんもあきらめなかった人なんでしょう。「大丈夫ですよ。私も7年前は全く走れない普通の主婦だったんですよ」とYさん。この言葉に今一度奮起！

UTMFを目指します！
「100里の道も一歩から」とりあえず、
毎日のジョギングを再開し続けていこうと思います。伊勢神宮初詣スーパーウォーキングはとても靈験あらたかな楽しいイベント。普段走ってないひとも根性で完歩されてました(何名かのリタイアはあったようですが)。次も行く予定です！誰か一緒にいきませんか？来年のことをいうと鬼が笑ってしまいますが、連絡お待ちしております。また12月はまだもうひとつ楽しいイベントがありました。それは4月から社会人になる娘の所属する大学オーケストラの定期演奏会。大学生活締めめの演奏会です。



幼稚園の年少からずっと習ってきたバイオリン。何度発表会、演奏会に駆けつけたか分かりません。嫁と違ってクラシックの分からない僕は、最初の頃は苦痛でしたが、今ではすっかり慣れ(今でも理解はできておりませ



が、、、笑)
娘の最後の晴れ舞台を楽しむことができました。ラストの曲でコンミスの大役をおおせつかった娘。ソロのパートもあり、1000人くらいの観客の中で、唯一の音源者となる娘をみていると、遅くなったもんだと感心したもんです。(ごめんなさい、親ばかモードです(^_^))でもまあ、オーケストラ以外ではまだまだ。社会人としてはくちばしが黄色いというか、まだ卵。どのような羽がはえるてくるかは、これからです。(ちゃんと飛び立つんだぞ！)そうそう、先日その娘の引っ越しを手伝ってきました。4年住んだ神戸を離れます。大阪生まれの大阪育ちの僕からすると、神戸は住んでみたいおしゃれな街。でも実際住んでみると、山手の街は坂道が多くて結構大変だったとのことで、「今度は平たい所に住みたい」と大阪の会社に就職。(実際はなかなか就職に苦戦したようで、平たい所が希望ってのは関係なかったようです 笑) 娘の人生の舞台は神戸から大阪は八尾へ。八尾は僕も今までほとんど接点の無かった土地ですが、街を歩くと駐車場代が御坊とそう変わらないのにはびっくりしました。物価が安く住みやすいようです。突然娘が、(きつと「今までありがとう！」という意味だと思うのですが)「親孝行したいと思うんだけど、何をしたらいい？」と聞いてき



が、、、笑)
娘の最後の晴れ舞台を楽しむことができました。ラストの曲でコンミスの大役をおおせつかった娘。ソロのパートもあり、1000人くらいの観客の中で、唯一の音源者となる娘をみていると、遅くなったもんだと感心したもんです。(ごめんなさい、親ばかモードです(^_^))でもまあ、オーケストラ以外ではまだまだ。社会人としてはくちばしが黄色いというか、まだ卵。どのような羽がはえるてくるかは、これからです。(ちゃんと飛び立つんだぞ！)

そうそう、先日その娘の引っ越しを手伝ってきました。4年住んだ神戸を離れます。大阪生まれの大阪育ちの僕からすると、神戸は住んでみたいおしゃれな街。でも実際住んでみると、山手の街は坂道が多くて結構大変だったとのことで、「今度は平たい所に住みたい」と大阪の会社に就職。(実際はなかなか就職に苦戦したようで、平たい所が希望ってのは関係なかったようです 笑) 娘の人生の舞台は神戸から大阪は八尾へ。八尾は僕も今までほとんど接点の無かった土地ですが、街を歩くと駐車場代が御坊とそう変わらないのにはびっくりしました。物価が安く住みやすいようです。突然娘が、(きつと「今までありがとう！」という意味だと思うのですが)「親孝行したいと思うんだけど、何をしたらいい？」と聞いてき





たので、平昌オリンピックモードの僕は「メダルを取ってくれたら嬉しい」と返すと、「それは無理」と一蹴(笑)そこで、「お父さんや

お母さんはまだ若い。あと30年は生きるやるから、今は気にしないでいい。だけど、お祖父ちゃんやお祖母ちゃんは違う。一番いいのはお祖父ちゃんやお祖母ちゃんを結婚式に呼んであげることや、曾孫の顔を見せてあげることやと思うよ」と伝えると満更でもない顔



でうなずく娘。「彼氏いるのかな？」うーん、父親としてはとりあえずの迷宮入りしておきましょう。でもまあ、これで2人の子供のうち1人は義務を果たせたかなという、「まだまだ、結婚させるまでは親の役目は終わってないよ」とお客さん。迷宮入りしとくって訳にも行かないようです(笑)

そんなこんな年未年始や今月の家庭の話をしてきましたが、今は確定申告の繁忙期。(確定申告って日本で最大の行事なんです。2月16日から3月15日までの1ヶ月間に2000万人以上の人参加するのですからこんなイベントは他にはないはず 笑)



開業したての頃はスタッフも少なく、所長は2時間の

睡眠時間で10日間くらいぶっ通しで仕事をしてたりしてましたが、今は違います。(だいたい、そんな無理な状態で仕事していると仕事の質はろくなものになりません、今だから言っちゃいますが (^_^)繁忙期といっても、副所長、主任をはじめ8名のスタッフで組織的、機能的に仕事しております。

多少の残業や土曜日出勤もありますが、日曜日はノージョブ。これで回るのですから、まだまだ余裕があります。「誰か税理士さん紹介してほしい」なんて言われることがあれば、是非きしゅう会計をご紹介します<(_)_>



そうそう、この時期に初めてなのですが、先週、事前通知なしのいきなりの税務調査がありました。(通常税務調査は事前に通知があり納税者、税理士と税務署と日程調整をしてから行われるのですが、現金商売などの場合には事前通知なしで行われることがあるのです。事前通知が必ず必要といった税法の規定はないので)。



税務署も税理士もお互い繁忙モード。署の言い分としては「確定申告の始める2月16日までは調査実施可能期間なんです」とのこと(これも初めて知りました)。結局飛び込みの調査のため、経理担当者もお休みで、また僕も東京出張だったので、お昼から1時間程の立会いしかできず、社長のヒアリングと資料の提出をするだけとなり、実際の調査は翌週となりました。



昔の超多忙で確定申告をなんとか乗り越えていた時代であれば、この調査とても対応できなかったでしょうが、今は余裕で対応できます。確定申告業務を切り盛りしてくれているスタッフのみんなに感謝です。



この本お薦め! ①
タルト・タタンの夢
～近藤文恵著～
バレンタインデー
月なので、美味しそうで、心の温まる
チョコレートのお話を
おひとつ。

近藤文恵さんは

大阪の女流作家。代表作は「サクリアイス」(自転車ロードレースのお話)ですが、今回ご紹介するのは、小さなフレンチレストラン、ビストロ・パ・マルで繰り広げられる料理に関するプチミステリー集「タルトタタンの夢」(全7話の短編集)です。パ・マルの三舟シェフの名探偵ぶりと登場する美味しそうなお菓子がメインディッシュのストーリー。7話の内一番のお気に入り最後に収録されている「割り切れないチョコレート」。このお話の中に「ノンブル・プルミエ」というチョコレート専門店が登場します。「ノンブル・プルミエ」というのは日本語で「素数」という意味です。素数は2・3・5・7・11・13・17・19・23・29...と、1より大きい自然数で1とその数でしか割り切れない数のことです。「ノンブル・プルミエ」は8個とか10個入りではなく、全てこの素数の数(3個、5個、7個、11個、13個、17個、19個、...)のセットになっている不思議なお店。物語はこのお店のオーナーの鶴岡氏とその妹さんのパ・タマルでのシーンから始まります。パ・マルで出されたボンボン・オ・ショコラにクリームをつける鶴岡氏。たちの悪いクレーマーではなく的を得た内容にチョコレートに対する熱い思いを感じる三舟シェフ。後日またやってきた二人。今度は何か激しく言い合っている様子で、怒って一人で店を

出て行く鶴岡氏。残されて呆然として料理も口にできない妹さんに、ヴァンショー(ホットワイン、パ・マルシリーズには何度も登場する飲み物。フランスでは風邪を引いた時にもよく飲まれるそうで、日本でいう玉子酒といったところでしょうか)を差し出し話を聞く三舟シェフ。2人は小さな頃から母子家庭だったそうで、お母さんは苦しい生活でも、いつも明るくて優しく、時々もらうお菓子も「私はいらぬから2人で分けなさい」と、自分はひとつも食べなかつたらしい。

そんなお母さんに美味しいチョコレートを食べしてほしいとフランスに修行に出た鶴岡氏。日本に戻り自分の店をオープンし大成功。妹は忙しいのは分かるけど、すっかり体調を崩して余命幾ばくもない母親に会いに来てほしいと切願していたのだという。それでも、今は会いにいけないという兄に妹は「お兄ちゃんはお人が変わってしまった」とため息を漏らす。そんな妹に三舟シェフは、「お兄さんは何も変わっていないよ。店の名前から分かるよ。お母さんは昔、2人で分けられなくて残ったときだけお菓子を食べてなかった？」と切り出します。「はい、2人で喧嘩になってはいけなかったからそんな時だけ食べてくれました」



「やっぱりね。きっとお兄さんは全国にいるそんなお母さんを応援したくて、必ずひとつ残る数のセットにしているんじゃないかな。お兄さんはとても優しい人だね」

すみません。完全なネタバレですね(^_^) 他のお話も面白いので興味をもたれた方は是非お読みください。お薦めです!